
厨二病なバケモノと魔女っ子男の娘の異端劇

ゴリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厨二病なバケモノと魔女っ子男の娘の異端劇

【Nコード】

N40750

【作者名】

ゴリ

【あらすじ】

なんかチートな主人公が転生するお話

幕開け

「北条先輩！！俺、は、初めて会った時から貴方が好きでした！
」

——九月中旬、放課後。夕方の屋上。
俺は伝える。

俺はこの気持ちは何なのか“最初から”はつきりと自覚していて。
この気持ちに気付いた時には正直戸惑い、徹底的に否定した。

俺は違う、と。——否、違うべきだと。

でも、掻き消そうと足掻いて足掻いてもがいても、それでもどう
しようもなかった。

そして結局、認めることで楽になるしかなかった。……でも、こ
うして、素直に気持ちを言えることができたみたいだ。

「俺と付き合って、くれませんか？」

うたるような暑さが鳴りを潜め、秋の始まりを告げる冷涼な風が
頬を撫でる。

俺の目の前にいる紺のブレザーを着た北条先輩は、まだ暗くなら
ない空に照らされて、小さくて可愛くて綺麗で、……そして、何よ
りも儚^{はかな}かった。

だけど、俺はこの人とずっと、一緒に居たい。

俺は先輩の女の子、北条弥生^{ちよひ}に告白した。

待っていたかのように。北条先輩は微笑み、時間が止まるかというぐらいの静寂の後、

先輩はそして答えた。

「だけど、峻。ごめんなさい」

一瞬、なにを言われたか、解らなかった。

背中と服の間に氷が落ちかのように、冷たさでひやっとなる。屋上を寒い風が抜けていった。

夕暮れがだんだんと闇だけの世界に変わっていく。

太陽が沈んでいつている。

「田藤くんには悪いと思うけど、それだけ。私はあなたに特別な感情なんか持ち合わせていないの」

拒絶された。断れられた。

そう理解するのに、数秒かった。

「……そう、か」

辛うじて出た声は言葉にならなかった。

俺の初恋は呆気無く終わった。

いや、全ては、始まってすらなかったのかもしれない。

思えば、これが元凶^{はじまり}だったから。

幕開け(2)

「なんなんだ、このありえん状況……は……」

神社が無限に広がる色のない空間。

そこに俺は立っている。

俺の記憶が確かならば、今日は夏明け半月ぶりの登校日の筈だ。

いったい何がどうなっている？　というか、どうしてこうなった。俺は一旦、現実から目を背け、今日を思い返してみることにした。

目を醒ましたのは、朝六時。

普段着を着替え、朝食を食べ、身支度を整え。

それから学校に向かうべく、混雑を極めた駅前へと向かった。

そして、駅前に向かう途中、近所の狸のお地蔵様の前を通りかかって。

その時、唐突に何故か周りの空気が急激に寒くなって。なんだろう、と俺は辺りを見渡して……。

……そこからの記憶は無い。

そして、その俺の前には、

「お前、さっきの狸地蔵じゃん」

狸と人間を組み合わせたような“人”がそこにいた。

「つまりは、あんたは神サマ的なアレなアレで気が付いたら俺はここにいたと？」

「……そうなるな」

「なにそれこわい」

「えっ」

「えっ」

目の前の神様を名乗る狸人間の話を聞いて、俺は愕然とした。自分の正気を確かめたい。

聞くところによると、絶対にここには人間が来れる場所じゃないとかなんたらで普通の人間なら、この場所に来る途中に肉体は文字通り消滅するから、今現在俺は精神だけの状態な上、元へ戻す方法も無いらしい。

「だ俺もありえねーとは思っただけどさ。全く、運命なんて、何処の誰が始めたのかねえ。実際にこうなるとな」

狸顔を二ヘラと歪めて自称糞神は、無責任極まりない言葉を口にする。

「ええー……」

そう呟き、俺は思わず頭を抱えてしまう。

理不尽な展開。要は突然お前は死んだと宣告されたようなものだ
誰でも納得できるはずはないだろう。

しかし、目の前で不気味な笑みを浮かべる“存在”がこれがただ
の冗談ではないことを物語っていた。

「あんたなら別の肉体ぐらい作れるんじゃないのか？」

何となく答えは予想できたが、一応は聞いてみる。

「冗談を。俺はただの神だ。人間の創作物じゃあるまいし。」

「やっぱ無理か……」

つまり最早、どうにも出来ないということだろう。

長いようで短い人生だったが、これで完全に終わったらしい。

「まあ落ち込むな。誰でもこういう事はあるさ。生と死の差なんて
のは人が言うほどはつきりしてないのさ。あるのは混沌だけだぜ？」

「……俺は神サマってのはそれすら超える凄いものだと思ってたが」

「俺たち神は文字通り『鏡』のような存在だからな。現にこの空間
だってお前が創り出したようなもんだ。俺という存在すら存在に創
り出されたに過ぎない。この口調すらな」

「はあ？ 俺が？ どうやったら作れるんだそんなもん」

「だからここは『鏡』なのさ。人の心つてのは喜怒哀楽みたいに単
純じゃないだろ？ 法則、思想、概念。それらを生みだしたのは
人間だろう。……って事は何処かしらでお前が“想像”し、生み

出したと言っても過言ではないだろ。　つまりはそういう事だ」

「じゃあ、俺は心の奥底ではあんたみたいな事を考えてるのか？」

「誰かが想像したことも含まれているし、お前が想像したことも含まれている。　……ある意味人間は繋がっているのさ。　何かが生み出し何らかの意味を為す。　だから俺はこの姿でここにいるし、お前もここにいる。」

「……意味解らんから。　で、俺はどうなるんだ？さっきからお前が言ってる事は正直俺にはさっぱりわからんけど、俺がここにいるのもなんか理由があるって事だろ？」

「ああ。　“世界”の平行世界の一つに転生させる。」

「平行世界？」

「ああ、インド人は現世を基本的には苦しみが多い世界と考え、六道^{どう}を世界の根幹の世界というか……長い。　分かりやすくいうと“木の幹”で平行世界は“枝”なんだ。　そこになら俺の力でも飛ばせられる」

どうやら俺は枝に葉っぱの一つに飛ばされるらしい。

「じゃあ、俺はもう一度人生をやれるって事か？」

「“多分”な。　じゃあめんどいからもう飛ばすぞ」

狸顔の神がカツンと足を鳴らす。
すると無数の神社しかない空間の中に突如として、円形の門が現

れた。

その門越しに見える向こう側は暗く何も見えない。
本当に異世界に通じていそうだと俺は感覚的に理解した。

「……では、一応な。心の準備はよろしいか『俺』」

問いに答えるように、俺は門の前まで歩み寄る。
すると、門の間の空間が歪み始めた。

「あ、最後に一つだけ」

歪みがある門にさらに近付こうとした所を神が呼び止める。

「あつちはお前の知ってる“世界”だ」

何故か笑っていた。

狸顔なのに少し純粋に可愛いとか思ってしまった。

「どうも。それじゃ、そろそろ行くわ。」

「つれないな。……まあいいや。では、気をつけるよ。」

俺はさらに門に近付く。

歪みはさらに大きくなり手のような形になり、身体を包み込む。
ちよつと気持ち悪さから目を瞑るが、その歩みは止められなかった。

「総てには必ず意味がある。……それだけは忘れないで」

意識が途絶える瞬間、そんな言葉が耳に届いた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4075o/>

厨二病なバケモノと魔女っ子男の娘の異端劇

2011年11月13日08時37分発行